

『今昔物語集』に見える「兵^{ツハモノ}心^{ココロ}」(2)

—源氏の棟梁源頼義の場合—

児玉正幸*

The Medieval Japanese Warrior's Ethics as Exemplified by Yoriyoshi Minamoto
(The 11th-century Leader of the Minamoto Clan) in *The Konjaku Tales*

Masayuki KODAMA*

Abstract

It was the 12th-century leader Yoritomo Minamoto who formed the first political government of the warrior, by the warrior, for the warrior in Japanese history. He profoundly respected his 11th-century ancestor Yoriyoshi as the leader of the Minamoto Clan.

Yoriyoshi was the first great leader of the warriors in Sagami (Kanagawa prefecture). It was thanks to him that his descendant Yoritomo was able to form the first political government of the warriors in Sagami. How strong were the connections that Yoriyoshi formed with the Sagami warriors (1)? How did he live spiritually in Sagami (2)? In this paper I clarify these two points through *The Konjaku Tales*.

Conclusion (1) : The strong personal relationship between Yoriyoshi and his servants in Sagami is known through their battles against the Abe family, which was powerful in the Tohoku district and was called 'EMISHI (barbarian)'. For example, Tsunenori Saeki died a martyr to Yoriyoshi, mistakenly convinced of his master's death.

Conclusion (2) : What was of great importance in Yoriyoshi's spiritual life were the following things: wisdom and cunning (including political plots), his faith in the "Japanese mars" (Hachiman), and his respect for the Japanese emperor.

KEY WORDS : Yoriyoshi Minamoto

Medieval Japanese Warrior's Ethics

The Konjaku Tales

藤原摂関政治の絶頂期を到来させた藤原道長の
死去(1027)一年後に早くも、朝廷の統治の緩み
を狙いすましたかのように、坂東に平忠常の乱

(1028)が発生した。その国家的大乱を平定した
のは、源頼信・頼義父子であった。時に、1031年。
この大乱の平定を境に、河内源氏と坂東との結び

* 鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan.

付きは緊密になる。坂東に父子の武名が轟いたのである。帰洛後、小一条院あつあきら（敦明親王）に宮仕えする頼義の武勇と騎射の技に感服した平直方なおかた（貞盛流平氏の嫡流、頼信に先立つ追討使）は、頼義を娘婿に懇請。この縁談は頼義にとって渡りに舟であった。頼義は勞せずして、貞盛流平氏重代（平貞盛—相模介維将—維時—直方）相伝の所領と家屋敷（「鎌倉の楯（館）」）はもとより、相模国的人的資源（家の子・郎等）を獲得したのである。これが坂東の開発と経営で平氏に一籌を輸していた源氏一門の遅れを取り戻し、頼義が源氏棟梁へ成長する第一歩となった。

かくして大武士団率いる「兵の家」つはもの（『今昔物語集』卷二十三—第十五、卷二十九—第二十七）は、十一世紀の白河上皇より始まる院政期に成立することになる（石井進「院政期の国衙軍制」、『鎌倉武士の実像』[平凡社選書一〇八]）。

平忠常の乱平定の二十年後に、今度は奥州に朝廷の宸襟を悩ます兵乱が勃発。朝廷は1051年に頼義を陸奥守に任じて、浮囚（王化した蝦夷）の長、安部氏の追討を命じた。藤原摂関政治のたがが緩み始めた十一世紀中葉以降の東国（常陸国・下総国・上総国・陸奥国・下野国・上野国・相模国・武蔵国）には、二大軍事勢力が伸長することになる。一つは、河内源氏（頼義・義家）率いる坂東軍団。他は、安部・清原・藤原氏と続く奥州軍団。一世紀に及ぶその東国二大軍団の軍事的均衡を破ったのが、頼義の子孫の源頼朝である。頼朝は1189年、十七万騎を擁する奥州藤原氏の都、平泉を攻め落としたのである。こうして頼朝は、奥州への覇権を庶幾した父祖の源氏の棟梁、頼義の見果てぬ夢を実現し、着々と鎌倉武家政権樹立に向けて、地盤整備を進めた。

頼朝が東国平定の模範的魁として欽仰した武者は、父祖の頼義であった。頼朝は奥州藤原氏攻略に際して、種々父祖頼義の先例に準拠している。武門の棟梁、頼朝が御家人との主従関係を強化する目的で造営帰依した鶴岡八幡宮つるがひかは、実は一世紀前に父祖の頼義が奥州安部氏の討伐（1062年、安部貞任を破った前九年の役）を記念して、岩清水八幡宮さだとうより鎌倉の由比の地に勧請した八幡宮を修

造したものである。神仏への崇敬を、信義や質素儉約に優るとも劣らぬ必要不可欠な武家の徳目として、頼朝自らが率先垂範したのである。乱世を統一した頼朝には、そうせざるを得ないだけの時代状況があった。頼朝は源平合戦期の二股膏藥的な武士のあり方に鑑みて、強固な主従関係を特色とする鎌倉武家の倫理の確立に作為的に努力したのである。用意周到な頼朝は東国（坂東八ヶ国に安房国・出羽国を加えた、坂東十ヶ国）を制覇した暁に、御家人の精神的補強策として鎌倉武士道の確立にまで手を染めたのである。その慎重居士の頼朝が武門の棟梁の模範と鑽仰する父祖が、頼義であった。

その頼義は坂東相模軍団といかなる私的主従関係を結び（一）、いかなる精神生活を送っていたのであろうか（二）。以下、それを『今昔物語集』に即して探る。

一、棟梁頼義と坂東相模軍団との緊密な私的主従関係

『今昔物語集』が伝世する源頼義（988—1075）関連説話は二話だけである。それは「源頼信、朝臣、男頼義、射馬盗人語」ウマヌスビトヲイロシタルコト（卷第二十五—第十二）と「源頼義、朝臣、罰安部貞任等語」アベノキダツアラウナタルコト（卷第二十五—第十三）である。後話は、前九年の役（1051—62）を伝える『陸奥話記』の抄出である。当該説話には、平直方の女婿となった頼義と、貞盛流平氏の嫡流が相承してきた坂東相模の人的資源（家の子・郎等）との緊密な私的主従関係が、語り出されている。以下その分析に入る前に、坂東相模と頼義との関わりについて、少しく考察してみよう。

（1）坂東相模と頼義との関わり

坂東に発生した平忠常の乱平定後、帰京した頼義は、「世のをこの人」このひと（『古今著聞集』）と評された小一条院（敦明親王）の判官代として宮仕えした。狩猟好きの小一条院に同道する頼義は、下命に従い、武門の武技を披露した。その騎射の妙技が平直方の目に留まり、招婿されることになった（『陸奥話記』）。こうして、頼義は勞せずして、貞盛

流平氏重代相伝の所領と家屋敷はもとより、相模国の人的資源（家の子・郎等）を獲得したのである。その後、頼義は小一条院判官代としての職務の功績を買われて、首尾良く相模守に任命された。頼義は相模守に任命されるや、在地武士の組織化に精力的に取り組み、河内源氏棟梁の道を歩み出す。任国に於ける頼義の坂東相模軍団（「將軍麾下の坂東の精兵」として、例えば、平真平、菅原行基、源真清、刑部千富、大原信助、藤原兼成、橘孝忠、源親季、等の十二名）形成の様子は、次の『陸奥話記』に詳しい。

俗武勇を好みて、民多く帰服せり。頼義の政教威風大に行はれ、拒捍の類皆奴僕のごとし。しかれども士を愛し施しを好みしかば、会坂より東のかたの弓馬の士、大半は門客と為れり。

その後、相模守から常陸守に転任した頼義には、前九年の役が待ち受けていた。1051年、陸奥の浮囚（帰服した蝦夷）の長、安部頼良（のちに頼時と改名）が反乱を起こすや、同年陸奥守に任命された頼義（二年後には鎮守府將軍を兼務）は、坂東相模の家の子・郎等を引き連れて、現地に出陣することになったのである。その戦役を前九年の役（別名、奥州合戦又は十二年合戦）と俗に言い慣わす。その戦役を今日に伝える史料として、作者も成立年代も不明な『陸奥話記』が伝存している。その抄出が本稿で取り扱う「源・頼義、朝臣、討安部貞任等語」（『今昔物語集』巻第二十五一第十三）である。では、以下、本話の分析を通して、貞盛流平氏の嫡流が相承してきた坂東相模の人的資源（家の子・郎等）と頼義との緊密な私的主従関係を探ることにする。

（2）頼義と坂東相模の人的資源（家の子・郎等）との緊密な私的主従関係

頼義は1051年に陸奥守に任官されるや、直ちに勇躍、陸奥国に赴任、そこで東国掌握の機会を算段した。ところが、気負い立つ新国司頼義が現地に着任するや、朝廷は上東門院藤原彰子（道長の長女）の病氣平癒を祈願して安部頼良に対する

大赦を布告。安部頼良は千載一遇のチャンス到来とばかりに、勇名轟く新陸奥守頼義に恭順の態度を示し、同名は恐れ多いと、頼時と改名まで行った。攻撃の矛先を巧みにかわされた頼義は、その後、種々けしかけるが、安部頼時は一向に挑発に乗らない。東国掌握を焦る頼義の陸奥守としての任期が目前に迫った1056年、突如として、権守藤原説貞の子供、光貞と元貞の野営地が敵襲されるという事件が勃発した。真相解明に乗り出した頼義は、光貞から事情聴取を行った。光貞の推測によれば、

先年ニ頼時ガ男貞任、光貞ガ妹ヲ妻ニセムト云キ。而ルニ貞任ガ家賤レバ不用リツ。貞任深ク此ヲ耻トス。此レヲ推スルニ、定メテ貞任ガ所為ナラム。此ノ外ニ更ニ他ノ敵無し

光貞の一方的な揣摩憶測だけを根拠に、頼義は性急に安部頼時の討伐を決定した。仕組まれた交戦の口実とは言え、浮囚を余りにもこけにした国司側の策略に安部頼時は遂に堪忍袋の緒を切った。頼時自身は、1057年7月に、「鳥ノ海ノ楯」で戦死するが、嫡男貞任を要に安部氏の戦意は高揚するばかりで、貞任率いる「四千余人ノ兵」は「三千百餘人ノ軍」を率いる頼義を、黄海の地（岩手県東盤井郡藤沢町）で撃破した。惨敗を喫した黄海の白兵戦で壮絶な殉死を遂げた国司軍の「兵」の一人に、相模国の老兵、佐伯経範がいた。彼は乱戦のさなか、十重二十重の包圍網を辛うじて突破して落ち延びる部下から主君頼義の戦闘状況聞き出すや、頼義の戦死を誤信、直ちに主君あと追いの華々しい甲い合戦をすることに、躊躇は全くなかった。

「我レ守ニ仕ヘテ此年既ニ老ニ至ル。守亦若キ程ニ不在ヲ。今、限ノ尅ニ及テ何ソ同ク不死ラム」ト。

その随兵二、三人も「君既ニ守ト共ニ死ナムトテ敵ノ陣ニ入ヌ。我等豈ニ獨リ生カム」と同心して、壮烈な戦死を遂げている。

以上の一例を以てしても、頼義と坂東相模国の住人との間に緊密な私的主従関係が存在したことが知られる。祖父満仲と父頼信の時代に形成された原初的武士団は、頼義の代に到って、堅固な主従関係を特色とする本格的な武士団に成長したのである。次の『陸奥話記』の誇大表現は割引して受け取らなければならないにしても、頼義の押しも押されもしない棟梁としての地位は、自他共に認めるものであった。

將軍いよいよ噴り、大いに軍兵を發す。坂東の猛士、雲集雨来し、歩騎数万、輜人戦具重畳して野を蔽い、国内震懼し響応せざるはなし

二、頼義の「兵ノ心ハ」

別稿（『今昔物語集』に見える「兵ノ心ハ」（1）、『密教文化』第一八三号）で指摘したように、頼信・頼義父子の武門の倫理を『今昔物語集』に探れば、武門頼信と頼義父子の阿吽の呼吸、弓馬の術の神技の冴え、目的を達成しても恬淡淡白にして武技を誇らぬ謙讓の資質を伝える説話が、見いだされる。その説話は、「源・頼信、朝臣・男頼義、射馬盗人語」（巻第二十五-第十二）であった。その説話以外に、頼義の「兵ノ心ハ」を『今昔物語集』に探れば、三つの特質を「源・頼義、朝臣、尉安部貞任等語」（巻第二十五-第十三）の中に拾うことができる。それは、（1）武威発揚のための権謀術数、（2）八幡神信仰、（3）皇室への威服である。

（1）武威発揚のための権謀術数

坂東相模武士軍団の棟梁に収まった頼義が、陸奥の浮囚の長、安部頼時（頼良）の反乱鎮圧の朝命を契機に東国掌握の野望を抱き、陸奥守頼義にあくまでも恭順の態度を示す安部頼時を挑発して、無理矢理交戦国に仕立て上げた次第は、既に見た通りである。1057年の黄海での国司軍大敗以後、安部頼時亡き後の陸奥の浮囚を束ねる安部貞任率いる軍勢は、ますますその勢威を強化していた。国司軍の援兵が当てにできない状況下で、事態の打開を図る頼義は、夷を以て夷を制する政策の登

用を決定した。それは、出羽の浮囚の長、清原光頼・武則兄弟の籠絡であった。頼義の供応攻めにあつた清原光頼・武則兄弟は遂に心を動かし、一万余の大軍を率いて、頼義軍を来援した。「性沈毅にして、武略多く、最も将帥之器」（『陸奥話記』）と絶讃された頼義にとっては、東国の人心掌握、鎮守府將軍の面子維持のためには、物心両面の懐柔作戦や権謀術数を用いることに何の抵抗もなかったのである。

（2）八幡信仰

河内源氏と八幡信仰との馴れ染めは、頼義の父、頼信に遡る。頼信は武神の八幡信仰厚く、晩年（1046）に、山城の岩清水八幡宮に願文（源頼信告文）を奉納している（『岩清水田中家文書』）。これには、河内源氏の過去の栄光と将来の栄耀栄華が記載されている。父頼信の八幡信仰を継承した頼義は、とりわけ八幡神への帰依が厚く、嫡男源太丸（不動丸）（1039-1106）の七歳の春（1046）に、岩清水八幡宮で元服の儀式を執り行い、八幡太郎義家と命名している。嫡男を八幡神の申し子と確信していた頼義（霊夢伝説）は、その後、前九年の役出陣に際して、岩清水八幡宮に戦勝を祈願、奥州安部氏追討の帰途には、鎌倉の由比の地に岩清水八幡宮を勧請した。これが今日の鶴岡八幡宮である。鎌倉に岩清水八幡宮を勧請したのは、相模国の鎌倉を今後の東国掌握の拠点としたい、という頼義の強烈な意志の発露であろう。頼義は故郷の河内国に凱旋すると、早速、本拠地の古市郡壺井郷（大阪府羽曳野市）にも岩清水八幡宮を勧請して、壺井八幡社を造営した（1064）。

しかしながら、そもそも岩清水八幡宮を鎌倉や河内に勧請するからには、それだけの強固な理由が頼義にはなければならないはずである。それは一体何か。

それを「源・頼義、朝臣、尉安部貞任等語」（巻第二十五-第十三）の中に探ってみる。1062年、頼義率いる国司軍が安倍氏の最後の牙城「厨川・姫戸二、楯」を包囲した折に、頼義の平生の八幡信仰の果実とも言うべき奇瑞が如実に出現したことを、以下の説話は伝えている。

爰^{コソ}守^{カミ}馬^{トリ}ヨリ下^{シタ}テ、遙^{ハルカ}ニ王^{ミヤ}城^コヲ礼^{ライ}シテ、自^ミラ
火^カヲ取^{トル}テ誓^{チカヒ}テ、「此^{コノ}レ、神^{イデ}ノ火^{ケタリ}也」ト云^{イハ}テ、此^{コノ}ヲ
投^{ナクナク}テ。其^ノ時^{トキ}ニ鳩^{ライ}出^{イデ}来^{キタリ}テ、陣^{カケ}ノ上^カニ翔^{カケ}ル。守^{カミ}
此^{コノ}ヲ見^ミテ、泣^{ナクナク}々^{ナクナク}此^レヲ礼^{ライ}ス。其^ノ時^{トキ}ニ、忽^{アハ}ニ暴^{アラ}キ
風^{カゼ}起^タテ、城^{シロ}ノ内^{ウチ}ノ屋^ヤ共^{トモ}一時^{トキ}ニ焼^{ヤク}メ。

鳩は八幡宮の使霊。従って、危急存亡の折にどこからともなく飛来した鳩の乱舞は、頼義にとって、忝くも八幡神が誓願を嘉納した瑞兆に他ならなかった。元来、武神の八幡神とは応神天皇のことであり、もともと山城の岩清水八幡宮も応神天皇生誕の地、北九州の宇佐八幡宮からの勧請である。ともあれ。頼義以来江戸時代まで、源氏一門による武神八幡信仰は一段と白熱化してゆく。

(3) 皇室への威服

十一世紀の源氏一門は完璧に朝廷の飼犬であった。満仲・頼信・頼義・義家と続く河内源氏も御多分に洩れず、朝廷のフィクサーたる藤原摂関家のお髭の塵を払っている(拙稿『今昔物語集』に見える「兵ノ心ハハ」(1)、『密教文化』第一八三号、参照)。この時代の武門の棟梁、頼義や義家にしても、朝廷への反逆は弾圧の対象でこそあれ、次世紀に実現する武家政権の樹立などという考えは、彼らの脳裏をかすめることがなかった。逆に言えば、十一世紀の代表的武門の河内源氏といえども、それだけ平安王朝律令国家体制の網の中に深く組み込まれていたのである。

頼義は信仰する八幡神の御加護を得て、最後の決戦の舞台となった厨川の柵の放火炎上に成功した。籠城する安倍貞任軍は大混乱に陥り、包囲網が解かれた一角から雪崩を打って逃走。それを計算に入れていた国司軍は追撃を掛けて皆殺しを図る。生け捕りにされた敵将の一人に、散位(位階はあっても官職なし)藤原経清(『陸奥話記』では散位藤原朝臣経清)がいる。経清は巨理権守と通称されている点から推するに、宮城県巨理郡に土着した軍事貴族であろう。彼は秀郷流藤原氏の末裔で、安倍頼時の娘婿であった。前九年の役開戦当初は、彼は国司軍に身を寄せていたが、自分と全く同じ

立場の平永衡(陸奥守藤原登任の元郎等で、主君に随行して、陸奥に下向。のちに安倍頼時の娘婿となって主君の登任に背いたが、新たに着任した陸奥守源頼義には帰服。伊具十郎とも呼称される点から推するに、宮城県伊具郡に土着した武門)が讒言にあつて打ち首にされたのを知るや、明日は我身かと疑心暗鬼に捉えられた。彼が考え抜いた末の陣中脱出劇は、国司頼義の留守宅に残された妻子が狙われている、と流言飛語を放つて国司軍を国府に急遽帰還させる間に、大混乱の中を「私ノ兵八百余人」を引き連れて落ち延びるシナリオであった。計画はまんまと図に当たり、彼は舅の頼時の下に一目散に逃げ込み、以後、国司軍を散々に翻弄することになる。寝返った智将経清の抵抗が頑強に続いただけに、おそらく平忠常(忠恒)の乱平定後、源頼信に「名符」(臣従を誓約する一族郎等の名札)を捧呈しているであろう上総国出自の経清の謀反は、頼義にとっては、恨み骨髓に達する大事件だつて相違ない。その証拠に、経清が生け捕りにされたと聞くや、直ちに尋問の末、

汝^{ミカド}ヲ、我^{カミ}ガ相^{シカ}傳^{トシ}ノ從^シ也。而^{シカ}ルニ年来^{トシ}我^シレヲ蔑^{ナイガシ}ニシ、朝^{ミカド}ノ威^{カミ}ヲ輕^シメテ、其^ノ罪^{ツミ}取^リモ重^シシ。

と、有罪を宣告した後で、「守鈍刀ヲ以テ漸ク経清ヲ頸ヲ斬ッ」と言う。実は、その経清詮議の場で言い渡した有罪判決の中に、頼義の対皇室感情がはからずも表れ出ている事態を、私たちは見落としてはならない。

「朝ノ威ヲ輕メテ、其ノ罪取モ重シ」。